

農村舞台の三週間

佐藤憲治

拜宮農村舞台復活公演に先だつて、五月二十二日(土)には徳島市の犬飼農村舞台で松小舎による現代舞踊と人形浄瑠璃、和太鼓のヨラホレシヨシ、翌週三十日(日)には勝浦町今山農村舞台で、同町出身の文楽人形遣い、吉田文司さんの文楽公演が行われた。いずれも農村舞台の魅力を一十二分に引き出した見応えのあるもので、こうした公演が三週連続で開催されたことは、全国どこにも真似のできない徳島の文化力の高さを表しているのではないだろうか。

今山農村舞台の 文楽公演

「雨」との天気予報がはずれ、晴天に恵まれた勝浦町の今山農村舞台では、保存会のみなさんが、「まだわからん。去年のように(高津住男氏の演劇公演)、開演してから大雨が降ることもある。」と、青空の下、半分本気で心配していた。その心配をよそに、ほぼ予定どおりに開演し、五月の夕暮れ時から夜にかけての素晴らしいコンディションの中、吉田文司さんの芸能生活三十周年を記念する公演が行われた。

勝浦座の式三番叟で幕が開けられた後、「みんなで創る農村舞台」をテーマとしたシンポジウムが行われ、吉田文司さんを囲み、大和会長、川上副会長など阿波農村舞台の会の関係者も多数参加した。文楽座による「傾城阿波の鳴門」が始まるころには夜の闇がせまり、地元住民が手作りしたあんどんに灯がともされ、会場内をやらわらかく照らした。舞台照明にも手作りの和ろうそくが使われた他、おつるが花道から去りゆく場面では、その頭上に蛍が舞うなど農村舞台ならではの演出も行われた。

演出も行われた。そんな舞台を背景に、吉田文司さんは、おつるの主遣いとして出演し、文楽座のみなさんといっしょに緊張感あふれる阿波鳴を演じてくれた。



犬飼農村舞台での 阿波遊行

松小舎 檜千尋

犬飼農村舞台、ずっと憧れていました。この舞台で何かをしたい、と。それは別に阿波遊行でなくても、音楽系のコンサートでも芝居でも、何でもよかったのです。この空間に身を置いて、時を過ごしたいと、そう思っていました。

阿波遊行は、言葉のとおり「阿波」に「遊びに行く」です。阿波に残された自然や建物等を舞台にして、そこへ観客の皆様は勿論、出演者も遊びに行こう、そんな考えを基に公演しています。そしてその土地の風土や人々と出逢い、交流できる機会になれば、とも思っています。やりたい時にやりたい作品をする、ということもわがまままでいいたくな遊びでもあります。

今年一月、犬飼の方から舞台使用の許可を頂きました。阿波遊行の公演が決定すると同時に、テーマに舞踊作品でも馴染み深く、人形浄瑠璃の外題でもある「日高川入相花王」を選び、その上演経験を持つ青年座さんに出演を依頼し、舞踊と和太鼓と人形浄瑠璃をまとめる演出を東京の柳下先生にお願ひし、そして他の出演者やスタッフとの打ち合わせ、全てが同時進行でした。今考えると《やりたい》という気持ちで突っ走るだけで、冷や汗も踊り手としては、犬飼農村舞台で踊ることができ、共演者・スタッフにも恵ま



れとても幸せでした。あとは観た方にそれぞれ感じた事がありましたら、本当に有り難い事だと思います。幸いにも好評を頂いた公演ですが、一つ菌車が狂えば惨憺たる結果であったことも承知しています。舞台を作ることも喜びや楽しみと苦しみや不安を全て遊びとして、阿波遊行を続けていきたいと思っています。最後になりましたが、犬飼の皆様をはじめ、犬飼で阿波遊行をしたい、と思ひ行動を始めた時からたくさんの方にお世話になりました。この舞台に借ってくださるすべての方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。本当にありがとうございます。

小屋を掛ける準備期間中は、写真やその他の資料など皆無に近かったが、工事が進み立体化すると、散歩の途中に立ち寄り「ほういや昔はよう見たわ。」とか「何処そこの田圃で見たことがあるよ。」などの声が聞かれるようになった。私はその都度、規模や構造のことなどを尋ねたが、誰からも私が期待するような答えは得られなかった。そんななか順調に工事は進んでいた。

やがて完成も間近になった頃、マスクミの報道で見に来てくださった有井氏と出会った。氏は戦後、実際に幾度もの小屋掛作業に関わった方である。氏の手掛けた小屋は長期興行のものではなく、単発的な興行のもので、間口4間(約8m)、奥行1・5間(約3m)程度の舞台と上手に太夫の席を設けた小規模なもので、楽屋などの部屋もなく、雨が降れば延期か中止、防水のことなどは考えてもいなかったそうである。構造的にも非常に簡素で、丸一日もあれば掛けられる小屋掛けには欠かせない三つの道具(部品)があったようだ。それは前面を広く開放するためのもの、一つは開口部上部の梁にあたる丸太、二つ目はその梁の中央部を持ち上げる天秤梁、も

二〇〇三年 小屋掛顛末記(続)

A+U 森兼設計室 森兼三郎

う一つは天秤梁の尻部に掛ける分銅である。以前に藍住の某神社に、小屋掛けの諸道具が保存されているという話を耳にしたことがある。それは、筵や薦などを含むすべての道具類でなく、開口部を造るための三点セットであることが判った。稲・麦・大根などを干していたや、建築現場の仮設足場に使用していたナル(丸太)、豆や穀物の乾燥に用いられた筵などは、当時いつでもどこでもすぐに調達できた。まして小規模の小屋であれば、簡単に入手できたために、すべてのものを保管する必要もなかったのである。長期興行も同様、小屋前面の開口部を大きく開放することが、舞台造りの課題であったようである。我が国の伝統的工法では、大開口をとるには大きな部材を用いていたが、明治以後、西洋の建築技術が伝わり、柱間を広くとるためにトラス工法が採用されるようになった。それは細い部材を組み合わせたもので、学校の校舎や駅舎などに多用された。江戸時代から続いていた小屋掛けにはまだトラスを採用する技術はなく、大きな部材を架けることもできなかったためで考えられたのが、天秤で吊り上げる工法であった。

有井氏の証言で戦後実際に行われていた小屋掛けの構造や規模が判ったことは大きな収穫である。今回の公演では、次のような条件が科せられた。①雨天決行としたため完全防水の構造としなければならぬ。②座の

